令和3年度 東北ブロックPDCAサイクル

施設名	課題	目標	目標達成の検証方法	結果	改善
東北大学病院	診療体制の充実	AYAがん患者の診療体制のあり方を病院全体で検討し、かつ小児科から成人科へのTransitionのあり方についても検討して、これらの診療体制の確立を目指す。	AYA世代がん患者診療体制WGを通じて、多職種スタッフ雇用状況の把握、多職種間連携のあり方、小児科と成人科の連携・Transitionのあり方が確立されたか、その進捗状況を検証する。	AYA世代がん患者診療体制WGが病院全体として複数回開催され、多職種スタッフ雇用人数と雇用形態が集計された。多職種間連携とTransitionのあり方の情報共有と議論がなされ、一定の共通認識を得ることができた。	多職種間連携とTransitionのあり方については、引き続き病院内での議論が必要である。
	人材育成の向上	多職種スタッフの雇用継続とともに、小児がんに関する講習受講をさらに進めて患者支援の質向上に努める。	多職種スタッフ雇用が継続され、講習受講状況が促進されているかを検証する。	多職種スタッフ雇用が継続されており、講習受講状況の把握を行い、受講が促進されていることが確認できた。	今後東北ブロックの小児がん拠点病院として継続研修やLCAS（長期フォローアップ講習会）の主催運用体制について詳細を決定する必要があり、現在検討中である。
	小児がん相談支援の改善	高校生学習支援の各高校での体制に格差がなくなること、長期フォローアップ外来の事前カンファレンスが必要がすべての患者に行われることを目指す。	高校生が入院後、いつから遠隔授業が受けられ、単位取得に貢献したか、患者満足度はどうであったかを検証する。長期フォロー－アップ外来の事前カンファレンス症例数の推移を検証する。	これまでの対象症例一覧を作成した。スムーズに遠隔授業を受けられ、単位取得に貢献して患者満足度が高かった症例が多い反面、一部に高校側の理由で受けられなかった症例も存在した。長期フォロー－アップ外来の事前カンファレンスは月1回定期的に開催し、対象症例数は増加していた。	高校生遠隔授業については、対象症例が平等に授業が受けられるように各高校への啓蒙活動が必要であり、宮城県内高校を対象としたWEBセミナーを2022年3月に開催予定としている。
弘前大学医学部附属病院	診療体制の充実	妊孕性温存療法を積極的に活用する。	活用例数を集計する。	男性３人の治療前精子保存を行った。 女性は同種造血細胞移植前1人は希望されず、1人は検討予定。	女性の妊孕性保存について積極的に働きかける。
	人材育成の向上	多職種カンファレンスを積極的に行い、相互理解やスタッフの経験を蓄積する。	開催回数を集計する。	５例についてそれぞれ関連のある学校あるいは緩和ケアチームとともに必要時複数回カンファレンスを開催した。	緩和ケアチームとのカンファレンスをより早期から行ってもよいのかもしれない。
	小児がん相談支援の改善	フォローアップ手帳をより活用していく。	活用例数を集計する。	７例の小児がん患者に手帳を配布した。	配布後活用が不十分で、より積極的に活用する。
青森県立中央病院	診療体制の充実	「AYA世代の生殖機能保存の支援体制の構築」 →当院血液内科が行う支援体制の構築への協力を行う。	青森県がん診療連携協議会の協力を得て、検証を行う。	妊孕性温存療法研究促進事業に関する多職種からなる検討チームを設置することとした。	-
	人材育成の向上	「多職種スタッフの配置」 →相談支援に携わる人材を中心に、病院全体として、小児がんに関わる多職種に人材を育成する。	同上	妊孕性温存療法に関する検討チームを中心に、取組む予定である。	-
	小児がん相談支援の改善	「高校生の復学支援の構築」 →がん相談支援センターと連携し、復学支援を行える体制を整備する。	同上	がん相談支援センタースタッフが東北ブロック小児がん相談支援部会等に参加し、就学支援等の情報を関係者と共有した。	-

令和3年度 東北ブロックPDCAサイクル

施設名	課題	目標	目標達成の検証方法	結果	改善
秋田大学医学部附属病院	診療体制の充実	妊孕性温存に関しての説明内容の充実を図る。	説明の実施状況の確認。	年長児には少しづつ実施が増えている	どのように本人に説明するのがよいか検討するのに時間がかかっている
	人材育成の向上	多職種における小児がんに関する知識や対応力を充実させる。	多職種学習会の開催状況の確認。	できれば対面で行いたいが、現状困難。	遠隔でも伝わりやすい教材を準備すべきか
	小児がん相談支援の改善	高校生の復学支援や院内学級入級基準を満たさない学童の遠隔教育体制を整備する。	遠隔授業を受けた患者からの感想や評価。	おおむね良い評価をもらっている	授業数の拡大
中通総合病院	診療体制の充実	AYA世代の長期フォローを充実させる（サマリー作成、病状説明）	サマリー作成、病状説明実施数で確認	8割程度でサマリー作成、改めて病状説明実施した	さらに残りの患者のサマリー作成、病状説明を進める
	人材育成の向上	他職種の講習受講ならびに相談支援部会への参加を促す	研修会への参加人数で確認	医師以外の参加されず	引き続き、研修会の参加案内をすすめる
	小児がん相談支援の改善	患者会の活動を継続する	患者会HPを作成し、情報提供を確認	患者会の立ち上げ総会を開催、情報提供はメールで行っているが、HPの作成は未	HPを作成に向かう
岩手医科大学附属病院	診療体制の充実	医療クラークの外来補助を開始する	クラーク配置を確認	１０月から配置されている	患者待ち時間の短縮、医師の疲労改善
	人材育成の向上	造血細胞移植コーディネーターの育成	試験の結果を確認	試験を終了	結果待ち
	小児がん相談支援の改善	夜間小児疾患電話対応を医局で行うべく検討	現在検討中	コロナ対応のため現時点ではできないと決定	別の方法を検討中

令和3年度 東北ブロックPDCAサイクル

施設名	課題	目標	目標達成の検証方法	結果	改善
岩手県立中部病院	診療体制の充実	拠点病院、関連病院との連携を図り、患者さんのニーズに沿った適切な医療を提供する	実績の確認	拠点病院からの近隣在住の患者さんの紹介に対応している	引き続き、患者さんの希望に沿った対応に努める
	人材育成の向上	多職種カンファレンスの一層の充実を図る 多職種対象勉強会の開催、院外講演会等の参加を促す	実績の確認	病棟、外来スタッフへの勉強会を企画、実行したナース数名が本協議会への参加を表明	更なる啓蒙の機会の充実をはかる
	小児がん相談支援の改善	当院では対応が不十分なケースについては、体制の整っている他院への相談を慮する	実績の確認	期間中該当例なし	体制、対応方法の再確認
山形大学医学部附属病院	診療体制の充実	「他科・多職種の症例カンファレンス参加」 合同診療を行う他科および多職種とのカンファレンスを行うとともに、東北地区Webカンファレンスへの参加の声がけを行う。 院内CTBに参加し、特に固形腫瘍のカンファレンスの際に他科との連携を図る。	合同カンファレンスの開催、webカンファレンス、CTBに他科・多職種参加の増加があったか自己点検を行う。	合同診療を行う他科とのカンファレンスは適宜行った。 他職種カンファレンスとして、症例カンファレンスに病棟看護師以外にも院内学級教員が適宜参加し情報共有した。 CTBでは関連診療科との合同カンファレンスを複数回もてた。	改善あり。
	人材育成の向上	「多職種スタッフの配置」 内科との連携の一環として、合同で行われる研究会(山形造血器疾患研究会、山形血液研究会、小児AYA世代がんプロフェッショナル養成セミナー等）に積極的に参加する。	参加人数の増加があったかどうか、多職種の参加実数が増えたか自己点検を行う。	山形血液研究会が開催され、コロナ禍においても他職種が参加した会となった。 がんプロセミナーでは、他診療科医師、看護師、検査技師、薬剤師が参加した。	改善あり。
	小児がん相談支援の改善	「情報提供の充実」 小児がん患者、AYA世代の患者が求める情報を適切に提供できるように、MSWとの連携を深める	MSWと実際に連携して対応した症例が前年までよりも増加したか確認する。	MSWと保健所の担当者と相談し、移植後予防接種について実態調査中である。 MSWとの連携して対応した症例が増えてきていることで、医師側も社会的問題について勉強になった。	実数の把握まではできていないが、改善はあると考える。
宮城県立こども病院	診療体制の充実	iPad等を用いた面会、成育支援、教育支援の拡大	実施状況の確認	オンラインによりるボランティアの高校教育支援やiPadを用いたプレパレーションなどが行われていた。	より多数例への対応
	人材育成の向上	学会や研究会への参加	スタッフの参加状況の確認	全スタッフが学会もしくは研究会に参加、発表を行った	なし
	小児がん相談支援の改善	支援パンフレット配布の促進	配布状況の確認	追加配布が行われていた。	なし

令和3年度 東北ブロックPDCAサイクル

施設名	課題	目標	目標達成の検証方法	結果	改善
福島県立医科大学附属病院	診療体制の充実	福島県唯一のの小児・AYAがん患者診療施設として多職種と連携し各がん種に対応できる診療体制を構築し、先端的治療（陽子線、ハプロ移植、治験）を充実させ、難治性疾患の治療を行うことで全国規模での小児がん治療成績の向上に貢献する。	①拠点病院、連携病院との情報共有により、患者が希望する病院へのスムースな紹介。 ②新たな治験数、患者登録数を評価する。 ③他県からの紹介数、セカンドオピニオン数を評価し、する。	①　陽子線治療4名、ハプロ移植7名、治験2名の患者を受け入れ治療した。 ②放射線抗体療法の国際共同治験に参加し、治験を開始した。 ③他県より13名の患者を受け入れた。 ④セカンドオピニオン件数は9件であった。	ほぼ、予定通り目標を遂行できた。
	人材育成の向上	専門医、支援スタッフの人員確保と知識及び経験値の充実を図る。	地域における研究会、講演会、セミナーなどの開催、学術集会などへの積極的参加と発表を行い、コロナ禍の中、Web開催も並行して進める。	福島小児血液腫瘍研究会については6月は中止となったが、３月に開催予定。 webでの学会発表・参加も行った。1名が小児血液がん専門医を取得した。 専門HCTCに1名合格した。	コロナの影響で予定通りいかない面もあったが、目標はほぼクリアできた。
	小児がん相談支援の改善	生殖機能温存（精子、卵子保存）に関する相談員の育成 AYA世代からの相談に対応できるようにする。	小児AYAがん長期支援センターを中心に関連診療科と連携し症例数の増加を目指し、人員確保を目指す。	小児AYAがん長期支援センターの体制整備を行い。内規の制定、構成メンバーの確定、定期会議の開催などを行った。	小児がん相談支援体制の充実に関わる人員確保を目指して行政との協議を進める。